

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団
2016年度（前期）一般公募「在宅医療研究への助成」完了報告書

「エコーを駆使し、ケアに役立てる“技”を身につけた訪問看護師の育成」

申請者：志田 淳子

所属機関：宮城大学看護学群

提出年月日：2017年8月25日

エコーを駆使し、ケアに役立てる“技”を身につけた訪問看護師の育成

研究代表者

宮城大学看護学群 志田淳子

1. 研究の背景および目的

看護師は、療養者や家族がより良い健康状態でその人らしい生活を送ることができるよう支援を行う専門職である。具体的には、①医療的ケアをはじめとする生命・健康を守るための支援、②日常生活動作の支援をはじめとする生活を守るための支援、を日々実践しており、支援の基盤となる知識と技術にフィジカルアセスメントがある。フィジカルアセスメントは、会話や視診、聴診、触診を軸に対象者の状態を判断し、必要なケアを選択するために行われ、血圧計や聴診器をはじめとする器機を活用することも多い。しかし、看護師が超音波画像診断装置（以下、エコーとする）を活用してフィジカルアセスメントを行うことは、現在のところ稀である。エコーは操作が簡便で侵襲が少なく、フィジカルアセスメントに有用な器機でありながら、看護においてエコーが活用されることはほとんどなかった。そのため、現在も多くの看護師は、エコーは医師や一部の技師が用いる特別な診断器機との認識が強く、看護師が活用できるという意識は非常に薄い。

大型で高額だったエコーは、近年、携帯型として持ち運びが可能なまでに小型化し、画質も改善された。並びに、比較的低価格の機器が販売され、看護師がエコーを活用できる環境に変化してきている。看護師がエコーを活用する目的は、医師とは異なり診断ではない。患者の身体内部の情報をその場でリアルタイムに可視化することによって、状態を正しく判断すること、それにより、適切なケアの提供に繋げることが目的である。

特に在宅看護では、通常は訪問看護師が一人で利用者宅に訪問する。例えば、末梢血管の確保に困難を来すケースがあっても、病棟のようにすぐに応援を呼ぶことはできず、過度の緊張を強いられることがある。これは、刺し直しという身体侵襲を招く行為を複数回実施することに繋がり悪循環感を招くように、療養者への影響も少なくない。しかし、看護師がエコーを活用できれば、血管の走行や太さ、深度を事前に可視化できるため、点滴漏れしにくい血管に安全に刺入することに繋がる。このように、これまで看護師の経験知に頼って行われることがあったケアの一部が、可視化により、他の看護師や看護学生に視覚と言語により伝えることのできる知識と技術になる。つまり、エコーの活用により、看護師のフィジカルアセスメント能力が向上し、ケアへの信頼性も高まると考えられ、看護師のみならず、ケアを受ける療養者にもメリットが多い。

そこで、本研究ではエコーを駆使し、ケアに役立てる“技”を身につけた訪問看護師の育成に向けたプログラム試案の作成を目的とした。

2. 研究の方法・成果

訪問看護領域におけるエコーの活用についてのヒアリングを行った後、現任の訪問看護

師を対象にしたプログラム試案を開発した。さらに、プログラム試案の実施にあたって教育的役割を果たす大学教員の研修を行った。

1) 実施状況

(1) 訪問看護におけるエコーの導入に関するヒアリング

現任の訪問看護師4名を対象に、訪問看護におけるエコーの導入に関してヒアリングを実施した(2016年10月にグループインタビューを実施)。

その結果、「在宅の医師がエコーを使い始めたばかりで、看護師が使うなんて早いという考えられない」「医師への相談が必要」「看護師がエコーを使うなんて、看護がどこに向かうのか」という消極的意見が多くを占めた。これらは、看護師がエコーを使用する機会に恵まれなかったこと、看護師がエコーを使用する意義の認識が不十分であることに起因すると考えられる。このため、プログラム試案では、エコーの有効性のほか、訪問看護におけるエコーの活用の実際を紹介し、エコーを活用した際に、現在行われているケアがどのように変わるかを説明することも有効であると考えられた。

(2) 訪問看護師を対象にしたプログラム試案の開発

プログラム試案を精選させるために、エコーを活用した教育研究に先駆的な取り組みを行っている複数の大学教員より、電話およびメールにて助言を受けた(7~8月)。これらの助言をもとに、プログラム試案の修正およびプログラムの評価方法を再考し、プログラム試案を精選した(9~12月)。さらに、プログラム試案を開発にあたっては、前述の教員から継続的に助言を受けた(2月, 7月)。

プログラム試案は、1回目は講義と演習を組み合わせた初回研修と、演習を中心とした継続研修にて構成される。

(2) 教員研修

計画当初は、講師を招聘し、研修会を開催する予定であったが、エコーの基礎と実践を学ぶことができるセミナーへの参加の助言を受け、第4回および第5回看護理工学入門セミナーに参加した(2月, 7月)。各セミナーでは、講義および演習を通してエコーの基礎、臨床における活用の実際を学ぶことができた。また、プログラム試案における研修会の運営方法を整備するうえで、具体的なイメージを得ることにつながった。

さらに、7月にエコーの器機を3週間レンタルし、セミナーで学んだ知識と技術が定着するよう個別のトレーニングを行った。

3) 今後の予定・課題

プログラム試案に基づく1回目の初回研修は2017年9月下旬に実施する。研修後は、プロセス評価および影響評価を行い、結果をもとに教育プログラム試案を修正する。教育プロ

グラムは 2018 年度より本格的に実施する予定である。

一方、今回の助成期間内に、学生を対象にしたプログラム試案の開発には至らなかった。今後は学生の学修状況に鑑み、教育内容と方法の精選が求められる。

本研究課題は、公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成を受けて実施した。

参考文献

真田弘美, 他. 看護に役立つ! エコーの読み方活かし方. 照林社, 2013.